

九州地方の概観

(1) 分 布

日本列島の西端に位置する九州は、北部が対馬海峡を挟んで朝鮮半島南部と、南部が南西諸島を介して中国大陸東部に連なる地理的特性をもつ。また、ひとくちに九州といっても、本島のほか大小さまざまな島嶼からなり、四方を海に囲まれている関係から、多様な地勢と地理的環境をもつ。

今回の集成においては、種子島以南の南西諸島を除いて、本島および壱岐・対馬の2島から、前方後円墳554基・前方後方墳7基の計561基が確認された。旧国別の前方後円(方)墳数は表1の通りである。数の上では日向・筑前が突出し、この2国だけで全体の52%を占める。九州全体の前方後円(方)墳の分布は、北部の玄界灘沿岸域(筑前)、北東部の周防灘沿岸域(豊前・豊後)、東部の日向灘沿岸域(日向)、西部の有明海沿岸域(肥前・肥後・筑後)の4地域が集中の核となり、それぞれの核から周辺に向かって次第に希薄となる。

前方後円(方)墳の在り方は、水系や小平野を単位として通時的に形成された群を構成する例が一般的である。またその場合、1群の構成は単系列のものが多く、日向の西都原さいとばるや新田原にゅうたばるなどの大形古墳群のように階層的に構成された複数の系列を含むものもある。群の形成は開始期や終末期、継続期間に違いがあり、途中での中断や墳形変化など多様な個性をもつが、それぞれを形成単位として認めてよければ、単位は日向・筑前がおおむね各20、筑後8、豊前10、豊後13、肥前12、肥後15、大隅3、壱岐3、薩摩・対馬が各1の、約110単位が想定されることになる。

(2) 変 遷

九州における前方後円(方)墳の出現は1期に認められる。その段階での分布は北部九州とその縁辺および有明海沿岸域であり、特に筑前の糸島・福岡平野部と、筑後の宝満川流域での集中が顕著である。

出現期の前方後円墳には2種類の墳形がある。一つは前方部が狭長に延びて全体にバチ形に開く型(豊前の石塚山古墳など)、いま一つは後円部が不整形のものが多く、かつ後円部に対して前方部が著しく短く、バチ形に開く型(筑後の津古生掛古墳など)である。仮に前者をA型、後者をB型とすると、前方後円墳の出現の仕方に、最初にA型が出現する場合と、まずB型が出現したのちA型が現れる場合がある。B型の継続期間がどの程度なのか、そして出現の二相がどのような政治過程を意味するのか、今後の課題である。

多少の遅延があるものの、南部の大隅を除いて、4期までにはほぼ九州全域に前方後円墳が出現している。しかし、2・3期に比定される前方後円(方)墳は筑前以外ではきわめて少ない。こうした状

表1 旧国別前方後円(方)墳の数

国名	基数 ()内は前方後方墳の数
筑前	142(5)
筑後	44
肥前	60(1)
肥後	63
壱岐	12
対馬	4(1)
豊前	38
豊後	35
日向	150
大隅	12
薩摩	1
合計	561(7)

表2 墳長100m以上の前方後円墳(墳長・編年は「地域の概要」に基づく)

国名・古墳名	墳長(m)	編年(期)	国名・古墳名	墳長(m)	編年(期)
日向・女狭穂塚	177	5	肥後・長目塚	111.5	4~5
〃・男狭穂塚	167~	4	〃・天神山	110	?
大隅・唐仁1号	150	5~6	豊前・石塚山	110	1
日向・生目3号	140	5	日向・川南39号	110	5
筑後・岩戸山	138	10	〃・菅原神社	110	5
日向・横瀬	134	7	〃・茶臼原1号	110	6
〃・生目1号	125	5	肥後・弁慶ヶ穴	105	9
筑後・石人山	120	8	筑後・法正寺	104	?
豊後・小熊山	120	3~4	日向・松本塚	104	8
日向・生目22号	119	6~7	筑前・一貴山銚子塚	103	3~4
豊前・御所山	118	6~7	肥後・岩原双子塚	102	5
肥前・船塚	114	7	筑後・石櫃山	100~	?
豊後・亀塚	113	5	日向・持田1号	100	5
日向・下北方1号	113	8			

況が九州を特徴づけるのか否か、今後の調査に待つ部分が多い。なお、数少ない前方後円墳はいずれも小形で、1~4期のうちに納まり、その後に継続しない。

4期以降、各地に大形の前方後円墳が出現する。墳長100m以上の前方後円墳をあげてみると、27基のうち12基を日向が占め、また前方後円墳の少ない大隅も上位に1基が顔を出している。数の上で日向に次ぐ筑前は、一貴山銚子塚古墳がかろうじて下位に登場する程度にすぎない。最大の大型墳が造られたのは地域によって多少異なるが、おおむね4~7期である。しかし、後述するように9期に地域最大の古墳が現れる地域もあるが、この場合でも、4~7期に大型化の一つの峰が認められる。

また、この大型墳の築造頂点を前後して、従来の首長墳系譜の断絶や中断、規模の縮小化、墳形の変更、ないしは移動、あるいは新たな首長墳系譜の登場など、さまざまな変化が顕著に現れる。詳細については各地域の概要で触れられているが、主なものをあげると、豊後の別府湾沿岸域や大隅では、7期で前方後円墳が終焉する。筑前では糸島・福岡平野部の前方後円墳の規模が著しく縮小するのに対して、宗像の首長墳が大型化する。有明海沿岸域では、肥前の有力首長墳系列が中部から東部の鳥栖地域に、肥後中南部の有力首長墳系列が宇土半島基部から氷川流域の野津古墳群に移動し、一方、筑後の久留米・八女に新たに大型墳からなる首長墳系列が始まる。日向では、西都原古墳群が築造を中断し、有力首長墳系列がいくつかに分解する。こうした変化は九州のみならず、多くの地域で確認できる。

9期には、筑後に北部九州最大の岩戸山古墳が出現した。この古墳が『筑後国風土記』逸文の筑紫君磐井が生前に造らせたとする墓に一致することは、明らかにされている通りである。この9期から10期前葉にかけては、前方後円墳の規模がやや大型化したり、あるいは中断していた首長墳系列に前方後円墳が復活した例や、群集墳中に登場するなどの変化もみられる。

(柳沢 一男・吉留 秀敏)